



グローバルに活躍する 公認会計士のあるべき姿とは。

中国、韓国、台湾、オーストラリア。日本とも関わりの深いアジア・パシフィックにおいてそれぞれ海外駐在を経て、幅広く活躍されている4人の公認会計士に、これからの時代に求められる「公認会計士のあるべき姿と価値」について伺いました。

PwCあらた有限責任監査法人 パートナー 齊藤 剛 Tsuyoshi SAITO

1992年青山監査法人 (Prince Waterhouse) 入社。東京事務所に勤務後、1998年PwC香港事務所に出向し、1999年から10年間、中国・上海にて日系企業進出の成長期を支える。2003年PwC中国のパートナー、中国日系企業業務責任者に就任。2009年以降は、PwCあらた有限責任監査法人のパートナーとして、海外に幅広くビジネス展開している日本企業を中心に、監査業務、財務報告関連アドバイザリーサービスを提供。2014年から2017年まで、PwC Japanグループのマーケットおよび国際業務リーダー、PwCあらた有限責任監査法人 執行役常務を務める。



有限責任 あずさ監査法人 シニアマネージャー 西谷 直博 Naohiro NISHITANI

2003年あずさ監査法人入社。国内において、上場企業や韓国系列を含む外資系企業の監査業務、IFRSアドバイザー、財務デューデリジェンスに従事。2007年に退職し韓国・延世大学語学堂に入学。卒業後の2009年、あずさ監査法人に再入社。2014年から4年間KPMG韓国に駐在し、韓国進出日系企業に対する会計・税務・デューデリジェンス、設立・外国人投資に関するアドバイス、ホテル市場調査に関するアドバイス業務に従事。2018年あずさ監査法人東京事務所に帰任し、会計監査やIFRSアドバイザー業務に従事するとともに、韓国のカンントリーデスク、アジア上場アドバイザーグループの韓国チームを兼務し、クライアントの海外展開を日本側からサポートしている。



有限責任監査法人トーマツ ディレクター 山本 香子 Kyoko YAMAMOTO

1997年有限責任監査法人トーマツ入社。1997年から2006年まで主に国内監査業務に従事。2006年から2016年まで品質管理部門で主に独立性関連の品質管理業務に携わる。2017年から2019年まで、デロイト オーストラリア シドニー事務所品質管理部門にて独立性関連の品質管理業務に従事。2019年からレビュー・クオリティ・リスクマネジメント本部で主に独立性・利益相反関連の品質管理業務に就き、現在に至る。2010年から2016年日本公認会計士協会 倫理委員会 規範・独立性作業部会メンバー。2011年から2016年まで日本公認会計士協会 倫理委員会 職業倫理相談作業部会メンバー。



EY新日本有限責任監査法人 シニアマネージャー 近藤 正智 Masatomo KONDO

2004年公認会計士二次試験合格、EY新日本有限責任監査法人に入社。主に自動車業、医薬品業、金融業に対する監査業務を中心に従事。2008年公認会計士登録。2013年から2016年までEY台北事務所に駐在。日系企業の台湾での窓口として、台湾への進出支援、監査、税務、アドバイザー、トランザクションなどのサポート業務に従事。



一まずは自己紹介と、海外駐在の経歴をお話しくさいますか？

齊藤 PwCあらた有限責任監査法人の齊藤剛です。私は、1998年から1999年までの1年間、香港に駐在し、その後、上海に異動して1999年から2009年までの10年間、PwCの上海事務所勤務しました。当時はちょうど日本企業が中国にこぞって進出する、進出ラッシュのタイミングでした。上海駐在の日本のメンバーはだいたい3年の周期で帰国するのですが、私は「どうしても残ってほしい」と言われたこともあり、結局10年間、現地でパートナーとして日本企業の業務統括をし、2009年に日本に戻り、一昨年までいわゆるPwCのジャパニーズ・プラクティス全体のネットワーク統括をしておりました。

山本 有限責任監査法人トーマツの山本香子です。私は、2017年1月から2019年3月まで、オーストラリアのシドニーに赴任していました。元々監査のバックグラウンドで監査業務を10年間、その後は品質管理部門で主に独立性に関する業務を担当し10年近く経った頃、シドニーに赴任しました。シドニーでは日本にいた時と同じ分野での業務に従事して、2019年4月に帰任しました。

西谷 有限責任 あずさ監査法人の西谷直博です。私は、入社以来ずっと監査業務をやっておりましたが、入社後4年経った頃に監査法人を一度退職し、韓国の大学に留学しました。卒業後は再びあずさに入社

しました。韓国は私のバックグラウンドのひとつであることから、いつかは韓国で仕事をしたいと考えていたところ、2014年にその機会が舞い込み、2018年7月までの4年間、ソウルに赴任しました。帰任後も監査業務が主な仕事ですが、監査だけでなく、韓国関連業務のサポートやセミナー講師、社内での質問対応、日系企業の韓国進出を日本側からサポートする仕事もしています。

近藤 EY新日本有限責任監査法人の近藤正智です。私は、2013年から3年間、台湾の台北に赴任しました。台湾に進出した日本企業をサポートする業務で、日本人は私を含め2人しかいなかったため、日本に関する案件は全部担当することになり、台湾に進出した日本企業をサポートする、いわば何でも屋的な立ち位置で仕事を担当しておりました。帰任後は監査業務がメインですが、JBS (Japan Business Services) 部門に籍を置き、日本から台湾に進出したクライアントのサポートや、海外対応が難しい監査チームのサポートなどを日本側から行っています。台湾での駐在経験は、今の仕事にとっても役に立っています。

一公認会計士を目指されたきっかけは？

齊藤 私は、出身高校が早稲田実業で、当時はまだ商業科があったので簿記、会計、税務、経済学などを高校1年生からひと通り勉強していました。その流れで、自然に公認会計士という職業を知り、大学はそのまま早稲田に進学できるので、「公認会計

士という専門職にチャレンジしてみよう」と考えました。周りには、同じく公認会計士を目指す先輩や同級生、公認会計士になったOBがたくさんおり、そういった人たちの啓発を受けたこともきっかけになりました。色々な業界や企業を知ることができ、海外にも触れることもできる点がとても魅力的だったので、公認会計士の道に進むことに決めました。

山本 公認会計士の仕事のことは、ほとんど知らずに大学に入学しました。将来子供を産んだ後も続けられる仕事は何かと考えた時、女性は資格があったほうがいいのかと、なんとなく思っていた程度です。私は帰国子女で、アメリカの高校からの入学組でしたので親戚のアドバイスを踏まえ、日本語を巧みに操る弁護士よりも、好きな数学との関連性があるし、全科目合格が求められるから税理士試験よりもチャレンジかなと思ひ、公認会計士を目指すことを決めました。公認会計士の勉強を始めたのは、大学1年生の終わり。内部統制、監査、財務諸表は勿論、借方貸方なんてまったく分からないし、知らないことだらけでしたけど、嫌いな勉強ではありませんでしたね。

西谷 正直、公認会計士とはどういった仕事なのか、ほとんどわかっていませんでした。きっかけは、親に「一人で食べて行けるように一生ものの資格を取りなさい」と言われたことです。兄が医者で、同じく医科大に進むという選択もありましたが、理系が苦手だったので、医師や歯科医の道は諦めました。文系で考えた時、弁護士、税理士、公認会計士がある中で、何となくですが、公認会計士をやってみようかな、と考えて、大学1年の後半に公認会計士を目指す専門学校に通い出したのがスタートです。当時の選択科目は民法や経営学。数学的な科目は選ばずに、勉強していました。

近藤 私は、公認会計士になりたいという特別な思いはありませんでした。正直、大学受験で燃え尽きて、ボーっと過ごす日々が2年ぐらい続いていました(苦笑)。ある時「このままだとまずい、何かを目指してみよう」と思い立ち、経済学部だったので、



専攻に比較的近く、かつハードルが高いものと思った時に、大学の生協に置いてあるパンフレットで公認会計士の存在を知り、「やりがいのある仕事なんじゃないか」と考え、本気で目指してみようと考えました。

齊藤 私自身のことだと結構前のことになってしまうので、これから目指す方への参考として私の息子の話をさせていただきます。私の息子は大学4年生ですが、すでに監査法人の非常勤として働いております。私自身が公認会計士なので、職業については、彼も小さい頃から知っていました。インベストメントバンクはどうだ、コンサルティング会社は何をしている、総合商社はこんな仕事をしているとか、就職の情報収集をしていく中で、自分なりに「まずは公認会計士として基礎固め」をした上で、さらなるステップも視野に入れる将来像を描いているようです。公認会計士だから監査にこだわる、という感じではなく、幅広い分野に目を向けているので、そういう意味では、私の時代とは、目指すきっかけも資格取得後に見える風景も違ってきているのかなと思います。

一今と昔、公認会計士像の変化を、どう見ていらっしゃいますか？

齊藤 私が理想としている公認会計士像は、まず監査人として関与企業を含めたステークホルダーから信頼される存在であること、様々な業界の企業を熟知し、多角的なアドバイスができること、そして、日本と海外を頻繁に行き来していること、です。私がこの業界に入ったのは27年前ですが、当時入社した青山監査法人には、私が「理想とする公認会計士」がいましたので、働き始めた頃から、自分の理想を意識しながらキャリアを築いてきました。今、テクノロジーの進化、様々な業界の多くの課題や今後の可能性など、社会を取り巻く要素は複雑に絡み合っています。そうした社会状況や企業環境の変化について熟知できる職業は、公認会計士以外にはなかなかありません。テクノロジーが進化し、監査の大部分の作業がAIに取って代わられるというような議論もありますが、それでも、複数の業界を横断的に見ることができ、独立した立場で様々



なアドバイスや提言ができる公認会計士の価値は、昔も今も、おそらく将来的にも、変わらないだろうと認識しています。

近藤 入社当時と現在では、公認会計士に対する見方も変わってきました。当初は「公認会計士と言えば監査」という認識が強く、視野が狭かったのですが、今は、公認会計士のフィールドは想像以上に広いと感じています。必ずしも、監査法人にいてことだけが公認会計士の活躍のフィールドではなく、今日の公認会計士は、色々な視点で会社を客観的に見ることができます。もちろん、公認会計士のベースはやはり監査にあると思いますが、そこに囚われる必要はない資格なのかな、とも思います。

西谷 世の中が複雑化されていく中で、公認会計士に求められる像も変わってきていますね。昔は“1”の字のように、ひとつのことを深く掘り下げるイメージですが、今は“T”の字。公認会計士としてのベースの部分はもちろん、他の要素も加わり幅広いフィールドで、かつ深い知識が求められている気がします。監査人に求められる能力もちょっと変わってきています。昔はあった現金実査や現金を数えたりする作業は、今はほとんどなく、最終的に財務諸表を保証するという基本は変わりませんが、監査のアプローチ、AI及びデータの取り扱いなどに関する知識が要求されます。

山本 社会から期待される公認会計士像がこの20年でずいぶんと変わってきていることを、独立性の部門で仕事していても感じます。ただ、公認会計士の基盤である、物事を懐疑的にみたり、監査先や現場のプロフェッショナルに対するアドバイスをして、物事を正しい方向に導くというマインドやスキルは、今後も引き続き求められる会計士としての基盤だと思います。

一プロフェッションとしての公認会計士の最大のポテンシャルは何でしょうか？

齊藤 我々の職業、監査の世界は、基本的には資本市場があって、財務情報が大前提になっています。昨今はSDGsなどもあり、企業としても単に利益だけではなく、様々な要素を考慮したうえで経営にあたらなければいけない時代になっています。公認会計士のフィールドの基本は、資本市場であり財務情報になりますが、非財務情報、お金で換算できるもの以外の要素が企業、行政、ありとあらゆる組織において非常に重要になってくるだろうという認識を持っています。ですから、公認会計士も財務数値だけでなく、非財務領域により積極的に入っていけるかどうか、大きなポテンシャルになっていこうかと考えています。非財務情報に関する企業のパフォーマンスについて保証する、何らかの信頼を付与する、何らかのアドバイスをする、そういったニーズ

はどんどん高まっていくと思います。公認会計士がより積極的に非財務というものの重要性をアピールすることによって、世界全体が変わっていくのでは、という認識を持っています。

山本 確かに企業が社会の中で果たすべき役割が変化する中で、財務情報以外の情報に対する保証を独立した第三者である我々に求められるようになってきていると感じます。監査だけでなく、そういう業務もどんどん増えているので、私たちの将来という意味では、その領域における公認会計士のポテンシャルは非常に高いと思います。

近藤 ポテンシャルという意味では、「英語を取り入れていくと公認会計士のフィールドはもっと広がる」と思います。海外に駐在して一番感じたのは、ある程度コミュニケーションができるからこそ、仕事の幅が広がっていくということです。まだ不足はありますが「きちんと語学を勉強してよかった」と実感した3年間でした。ビジネスの世界は英語で動いている部分がたくさんあるので、公認会計士として英語ができると、さらにフィールドは広がると思います。

西谷 昔の寺小屋で教えた「読」「書」「算盤」、この3つができると何でもできてポテンシャルがさらに高くなります。今の時代に置き換えるなら「読」が語学で、「書」がパソコン、「算盤」が会計にあたるというわけです。この考え方は、現代でも十分に通じるものだと思います。この先、公認会計士とし



ての専門的スキルはもちろん、どんどん進化するITに関する能力も求められるだろうし、語学という意味では英語もそうですが、英語以外の現地の言葉、第2外国語ができれば、公認会計士としての業務範囲もかなり広がるのではないかと、思います。

齊藤 もうひとつ要素を加えるとしたら、「リスクにかなり敏感」ということでしょうか。現代はサイバーセキュリティ、地政学リスクなど、昔では到底考えられないようなリスクがどんどん出てきています。そのリスクを察知して評価し、リスクの高さや、どんな領域にリスクがあるか、その対応までアドバイスするという、ここまで一貫通貫のできる職業は、おそらく公認会計士以外には見当たらないでしょう。

山本 どんな企業もリスクマネジメントにとっても敏感になり、力を入れているので、そのサポートは確かに重要ですね。公認会計士は内部統制を理解しているので、会社としてどういう動きをするべきか、統制としてどういうことをするべきではないかということが、自然と身につけているところがあります。齊藤さんがおっしゃる通り、リスク感覚が高いので(笑)。同じことを言うのでも、専門家の公認会計士が言うのと重みがやっぱり違いますよね。実際の企業を見る目そのものが、公認会計士のポテンシャルに繋がっているのではないのでしょうか。

西谷 そうですね。仕事を離れ、プライベートでも「こうなったらこうなる」とか、色々考えてしまいます(笑)。言葉の重みが違うとおっしゃいましたが、公認会計士に限らず、どんなビジネスでもやはり「人間力」「人間味」を向上させていくということも、とても重要だと思っています。見積りを出す、提案をする、そういったビジネス上の取引の際、最後は担当者の「人間力」で決定されるクライアントもいるので、そこをどう磨いていくかということも重要だと思いますね。

—監査法人に入社後、思い出に残っているエピソードがあったら教えてください。

近藤 入社後2、3年目くらいの時、初めて



任せてもらったプロジェクトにかなり気合いを入れて臨みました。クライアントに色々アドバイスをしたり、自分としては一生懸命でかなり満足感もありましたが、プロジェクトが終わってから、そのクライアントからクレームを受けました。落ち込む私を見てクライアントの担当者の方が、「飲みに行きましょう」と誘ってくださり、その席で「近藤さん、色々頑張ってくれたのは分かるけど、相手のことをちゃんと見ないとダメだよ。相手が何を求め、何に困っているのかをちゃんと見ないと、せっかくアドバイスしてくれても、無駄になっちゃうから」とおっしゃっていただき、ハッとしました。自分の思ったことを貫いてやってきたのですが、結局、会社にとって必要な内容ではなかったの、何も良くなっていなかったんだ、と気づきました。それからは「独りよがりにならない」仕事をしようと、心がけています。公認会計士として仕事をしていく上での私の大切な価値観になっています。

西谷 韓国駐在中、すごく辛いプロジェクトがありました。私の専門は監査でしたが、赴任先のソウルでは日本人が私一人しかいなかったこともあり、監査はもちろん、税務、アドバイザー、買収案件、すべてをサポートしていました。その中のひとつに、KPMGソウルの同僚とクライアントの間をとりもつことがありましたが、仕事のやり方が違ったりしてうまく行かず、とても辛かったです。結果としてそのプロジェクト自体は失敗に終わってしまったのですが、後日クライアントから「結果としてこうなったけど、

西谷さんの仕事に対する姿勢や一生懸命さは評価しているから、これからも頑張ってください」と言われ、私がやってきたことは間違っていないかった、と思ったことです。

山本 業務を進める中で「ありがとう」と感謝されたこと、ですかね。「あなたにいいアドバイスをもらえたから、省庁との折衝がうまく進んだよ」など、自分よりずっと年上の監査先の方が、まだ20代前半の私に感謝してくださったり、大会社の経理課長から「あそこで山本さんが頑張ってくれたから、なんとか乗り越えられたよ」とおっしゃっていただいたことがとても嬉しくて、公認会計士でよかったなと思いました。当時はまだ若く視野も狭かったので、どんな細かい仕事も手を抜かず、がむしゃらで一生懸命でしたが、それを認めてくれる監査先に恵まれ、とても幸せでした。監査時代のいい思い出です。

一大事にされている姿勢や価値観、仕事のやりがいは何ですか？

西谷 私は“クライアントファースト”です。韓国赴任時は駐在員という立場でしたが、クライアントの要求もある一方で、当然ソウル側の言い分もあります。そこをうまく調整することも重要でしたが「クライアントにとって何が一番いいのか」を考えることはとても重要です。その中で、常に誠実に早く対応することを心がけています。自分が何を思い、相手が何を思っているか、何ができて何ができないのか、話さないとわからないところがたくさんあります。どれだけ腹を割って話せるか、どれだけ相手が思っていることがわかるか、ということが一番大事なのかなと思って仕事をしています。

近藤 台北時代はクライアントが非常に多い上に、それぞれが色々な悩みを抱えており、毎日のように相談がありました。心がけたのは「どうしてこの方は、このことに悩んでいるんだろう」と考え、話してみることです。クライアントもうまく伝えられていないケースもあるので「困っていることはこんなことではないですか？」と相手の話を聞きながら「では、こうしたらよくなるんじゃない

いですか？」と、コミュニケーションしていくことを心がけていました。

山本 自分が納得するまで、また相手に納得してもらえるまで、“突き詰めていくこと”が公認会計士の醍醐味だと思っています。独立性の業務では現場のプロフェッショナルに対して、厳しいことを伝える局面が多いのですが、単純に「ダメなものはダメ」ではなく、きちんと説明して理解してもらうというのがとても大切なことです。それこそ「人間力」ですね。

西谷 そうですね。この人が言うと納得感があるのに、あの人に言われると納得感がない、とか。この差はなんでしょうね(笑)。

山本 知識と専門力に裏付けされた人間力と同時に、私がずっと大事にしてきたのはコミュニケーションです。監査の現場で男性同士が話をしている「どうもこの2人の会話は通じていないな」と思って、自分からそこに割って入ったことでお互いの認識の齟齬を見つけて調整できることもありました。そういった丁寧な女性ならではのコミュニケーションは、とても必要なことだと思います。また、オーストラリアでは、周りの習慣に従って、日々顔を合わせる同僚の間でも頻繁にコミュニケーションをとるように心がけていました。単に「Good Morning!」だけではなく、「How are you?」から始まって「How was your weekend?」「How are your kids?」とか、皆が意識して仕事以外の会話をしていたので、お互いに対する理解が進み、信頼関係が構築されるので、仕事を円滑に進める上でとても役に立ちました。日本に帰ってから、そこは大事にしています。

齊藤 私はふたつほど、大きく転換点がありました。ひとつ目は、中国に駐在した10年間。当時は、まだ私一人しか日本人がいりませんが、日本企業はどんどん進出してくるため、監査だけではなく、ありとあらゆるサポートをしていく必要がありました。まだ中国の法規制が今ほど整備されている状況でなく、実務を進めていくのも一苦労でした。こちらは手探り状態の中、クラ

イアントは当然日本的なことを求めてくるので、そういう場面では、異文化に対応する能力が非常に重要になってきます。単純に語学だけではなく、上海にいた10年間は、異文化対応力とコミュニケーション能力を培うことができました。ふたつ目は、まさに今のタイミングです。多くの社会課題の解決が叫ばれている中で、企業の在り方、そしてどう公認会計士としての使命を全うするかが問われています。そんな中で週末の時間を活用して、ボランティアで地元のNPOの活動に理事として関与しています。NPOは、地域の市民が支えており、やってきた活動をどうレポートにまとめ、外部に発信していったらいいのかなど、監査法人の通常の公認会計士の業務とは全く違う世界に関わっています。NPOなので、当然利益を追求しているわけではなく、財務数値以外の非財務数値の報告方法、計画の立案方法、リスクの見極め方、そういった事をひとつひとつ説明していかなければいけません。しかも、簡潔に説明する必要があります。NPOを通じて社会で困っている人たちを支援するには、とてつもない馬力が必要で、監査の仕事でクライアントと話すような言葉を使うと、まったく通じません(苦笑)。そこでは、人間力が本当に問われますが、「正しいことを正しくやりきる」ところや公認会計士ならではの職業倫理観が軸としてあるからこそ、地域の方々もそれなりに耳を傾けてくれて、ついてきてくださっているのかなと思っています。

山本 まさに、社会貢献ですね。今の若い





人たちは、将来、仕事を通じて社会貢献することをとても大事だと思っているので、そういったフィールドもありだと思います。デロイト トーマツでは、社会にインパクトを与えられるようなプロジェクトをグローバルで展開していて、気仙沼の復興プロジェクトなどにも関わっています。公認会計士としてこうしたプロジェクトに関われるのも、やりがいのひとつだと思います。職業倫理に裏付けされた「正しいことを正しく行う」。それを追求し、貫ける公認会計士は、とても貴重な職業です。

—10年後の姿をどう想像されていますか？

西谷 私のルーツは韓国にあるので、日韓の架け橋として、日本でコリアビジネスをリードしていく人間になりたいと思っています。今、日韓関係は難しい状況にありますが、日本と韓国、仕事をするのはどちらの立場からでもいいので、互いのビジネスを結びつけるハブとして、そのラインにいたいですね。

山本 今、独立性とリスク管理的な仕事をしてしていますが、どうしても規制に追われ、規制当局に縛られている感があります。監査と非監査の分離とか、監査報酬と非監査報酬を何割に設定するとか、ステークホルダーのニーズを満たしながら、規制当局に働きかけて、そういった基準を設定していく仕事に携わっていきたいです。さらにもうひとつは、ガバナンスをもう少し勉強したいと考えています。

近藤 私は、台湾駐在時に海外事業で困っている日本企業をたくさん見てきたので、海外進出をしたい、海外事業で困っているクライアントをサポートできるようになりたいと思っています。これから日本企業にはグローバル化の波が否が応でも押し寄せてきます。企業によっては、初の海外進出で、まだ海外でビジネスをしたことがない、ということもあるでしょう。そんな場面で「こんなことで困るかもしれません」「こういったことで壁にぶつかります」とか、的確にアドバイスできる存在になっていきたいなと思います。あとは「若手公認会計士にいい影響を与えられるような人間」になりたいと思います。公認会計士になって経験を積むと、こういうことができるんだ、こういった面で社会の役に立っているんだということを、自分の行動で示せるようになっていきたいです。次に海外に行けるとしたら、ヨーロッパのロンドンやパリなど先進国の都市に行きたいとも思いますが、成長市場も魅力的です。動きがダイナミックで、制度も途上なので、我々公認会計士が役に立てる分野がたくさんあります。やりがいとしても非常に高く、面白いなと思います。

齊藤 10年という単位ですと、まだおそろく今の組織にいると思いますが、15年後であれば、もう完全に定年退職しています。別の組織にいるのか、個人で開業するのかわかりませんが、10年20年経っても変わらない「色々な業界、様々なセクターを横断的にサポートできる」という公認会計士の強みは、とことん活かしていきたいと思います。例えば、今の時代、自動車業界で言えば、昔のように自動車のことだけを考えればいいのかというと、そうではありません。テクノロジーが進化していく中でIT業界との融合が進むとか、自動車業界の中にサービスの要素が入ってきて、業界の垣根はどんどんなくなっています。その時に、横断的な経験を持っている、異業種の中でどういうリスクが生じるのか、どういう可能性があるのか、といったことを考える時に、公認会計士としての我々の経験や知見が非常に活かせるのではないかと思います。しかも、一つの企業にどっぷり入るというわけでは

なく、客観的な立場からそれを支援できるというのは強みです。色々なセクターを横断的に動かし、かつその支援ができる公認会計士の仕事は、今の組織の中でも目指していきますし、リタイアしても続けていくつもりです。企業の社外取締役として、あるいは顧問としてアドバイスしていく、というパターンもあるかもしれません。日本が大きく変わっていくダイナミズムに積極的に関わることができるような公認会計士でありたいと思います。

—「グローバル人材」についてどうお考えでしょうか？

近藤 異文化を理解する気持ちが一番大事かなと思います。「台湾にはこういう文化があって、こういう土壌があるので、こういう人たちが今いるんだな」など、現地の文化をできる限り理解しようとする姿勢です。言語やビジネスのやり方、様々な影響が浮かんでくるので、現地のことに興味を持って、知って、理解して、自分の中で、自分のやるべきことと折り合わせていくことが必要ですね。

西谷 言語は、できるに越したことはありませんが、できなくても、その人がどういう気持ちでやっているのか、その姿勢を見れば分かります。ソウル赴任時代、韓国の人がよくおっしゃっていたんですが「同じ日本人であっても、その人となりは見ればだいたい分かる」と。一生懸命やっている、できないけれども一生懸命やろうとしている、そういったことも非常に重要です。異文化を知ろう、相手を知ろう、相手の言うことにちゃんと耳を傾けて、オープンコミュニケーションすることは重要なことだと思います。また、後輩となる若者たちには、何事にも失敗を恐れずにチャレンジしてほしいです。誰でも一度や二度は絶対に失敗します。目の前の仕事に対してネガティブになって「嫌だからやめる」ではなく、色々な人の話を聞いて、やりたいことを見つけて、良い方向を目指してほしいです。自分が何をやりたいのか、長期的・短期的にきちんと考えて動き、その中で仮に失敗してもチャレンジ精神を持って取り組み続けてほしいですね。



山本 「人と仕事をする、人と関わるのを楽しむ」というのが大事です。オーストラリアは国の特徴でもあります。ファーム自体がダイバーシティ。自分が所属していた部署は40人中約30名がオーストラリア以外の国籍でした。オーストラリア人は少なく、それぞれのバックグラウンドを聞いても覚えきれないくらい(笑)、色々な国の人たちが集まっていました。それぞれの国を知ることができるというのは、とても楽しかったです。興味を持って入っていく、この国のこと好きだな、今楽しんでるなというのを見せれば、相手には必ず伝わります。こちらがオープンなら、相手も受け入れてくれます。人と仕事をするのだから、人が好きじゃないと難しいと思います。逆に好きならどこでも仕事ができます。よく日本人は自分の意見をちゃんとと言えないと言われるので、海外に行くと“NO”と言わないといけなく、はっきりと発言しないと、ストレートな英語でメールなどを書いてしまいがちです。ところが、欧米人は、思った以上に気を遣った英語を使います。心配りや思いやりを英語で表現するので、自分のステークホルダーに対する思いは、日本人以上にホスピタリティがあるかもしれません。オーストラリアに行って、欧米人の仕事の仕方、優秀な人たちの仕事の進め方に触れました。グローバル人材になるためには、「ただ英語でメールが書ける」だけでなく「回りくどくない気配りのある英語で伝える」、そこ

を学ぶことで、もうひとつ上のレベルのコミュニケーションが可能になるのではないかと思います。

西谷 ダイバーシティという意味では、海外ではLGBTにも素直に対応したいところです。ある人が海外駐在に行った時、社内の男性同士がプライベートで手をつないでいたことにショックを受けた、と聞いたことがあります。相手のバックグラウンドを理解したうえで、素直に接することも大切なのかなと思います。

齊藤 グローバル人材に関しては、経験上「ふたつのステージがある」という認識を持っています。ひとつ目は「日本や日本人をバックボーンにしたグローバル人材」。海外に行くと、色々な国の人と一緒に仕事していく中で異文化交流を図り、英語など別の言語でコミュニケーションをとり、その国の法規制の環境下で仕事していく。または、日本の中で、海外に出て行く日本企業、あるいは日本に進出する外資系企業をサポートする。いずれの場合も、共通しているのは日本、日本人、日本企業というバックボーンが強みになっていて、それを前提として異文化対応していることです。

ふたつ目のステージは、日本人とか日本企業とかそういうものをまったく抜きにして「単純にその世界に出て行き議論をして、まったく新しいものを作るレベルのグローバル人材」。日本人や日本企業とか、

そういったものは全く関係ないので、当然コミュニケーションも全然違うレベルの能力が要求されるでしょうし、日本人だから、日本企業だからという説明も通用しません。実際私も、一昨年まで日本のマーケットリーダーという立場で、PwCのグローバルマーケット戦略プロジェクトに関わっていましたが、世界中のマーケットリーダーが集まって、新たなグローバルスタンダードを一緒に作っていくというプロジェクトだったので、日本がどうだということとは関係なく、すべてにおいて自分がレベルアップしないと対応できないものでした。そういう意味では、IFRSの制度を作っていくという世界的なプロジェクトに日本代表として選ばれた同僚の女性パートナーは、まさにふたつ目のステージで活躍する本当のグローバル人材です。自ら世界に切り込んで、グローバルスタンダードを作っていくような人材が、これからもどんどん出てきてほしいですね。私自身もグローバルの先頭に行く、そんなお手本を見せられるような公認会計士になればと思っています。

このインタビューは2019年9月2日に実施されました。

 **日本公認会計士協会**
The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.jicpa.or.jp/>